

差	「	の	そ	後	る	自	つ	は	廊	に	ま		は	視	三	反	あ	ご	
し	昨	下	の	に	開	分	た	昨	下	宿	だ	「	部	界	度	動	え	と	更
出	日	へ	他	連	け	用	。	日	の	泊	早	明	屋	に	強	で	ず	閉	に
した	は	と	い	れ	放	に	自	こ	自	し	朝	日	か	入	い	む	頭	じ	枝
た	よ	出	く	て	た	な	分	け	分	て	だ	から	ら	れ	ず	の	て	を	を
ひ	く	て	つ	い	ま	つ	の	し	の	い	か	な	出	な	痒	割	終	伸	を
さ	眠	っ	か	っ	ま	た	記	に	憶	る	の	た	め	が	く	と	わ	ば	そ
し	れ	た	の	た	ま	た	を	言	を	音	か	た	の	ら	。	ら	せ	そ	う
を	た	。°	部	「	の	を	疑	わ	だ	だ	、	た	襖	。°	。°	、	と	す	る
超	か		屋	鏡	扉	下	わ	れ	け	が	や	を	静	も	う	持	思	考	
え	い		の	の	を	り	ざ	た	が	聞	は	か	か	う	一	ち	考	を	
石	？		方	間	目	、	る	通	こ	え	り	に	に	度	隣	帰	を	押	
の	「		を	』	指	正	を	り	え	る	自	一	出	の	の	っ	を	入	
階	」		眺	や	す	面	得	に	中	で	分	階	し	部	部	た	を	れ	
段			め	『	。°	に	な	へ	で	、	と	へ	、	屋	屋	も	を	の	
を			な	大	昨	見	い	と	、	番	雫	と	今	を	を	の	は	と	
下			が	浴	日	え	ほ	向	才	才	以	り	度	撫	二	は	と	り	
り			ら	場	あ	て	ど	か			外	」		で	二	と	り	は	
き			、	』	の	い	に	か						、	二	は	と	り	
っ			光		の	い	に	か						、	二	は	と	り	

も	川	ま	う	き	ら	こ	下		と	然	の	て	ど	少	に	「	「	そ	た
で	、	進	な	の	し	け	り	「	無	と	芯	歩	こ	し	い	あ	お	う	あ
き	あ	ん	屋	小	い	し	た	こ	言	し	が	き	吹	皮	い	あ	は	話	た
て	と	で	根	さ	建	に	石	れ	で	な	じ	始	く	肉	顔	あ	よ	し	あ
い	は	あ	付	な	物	尋	段	は	語	い	ん	め	風	を	に	う	う	か	た
な	森	の	き	な	や	ね	の	ど	る	こ	て	と	と	混	見	ご	ざ	待	た
か	し	の	の	池	目	る	更	こ	背	こ	い	を	言	ぜ	え	い	ま	ち	た
っ	か	休	大	や	を	。	に	に	中	こ	抱	わ	わ	た	。	す	。	構	。
た	な	憩	大	大	引	。	先	向	を	え	り	ん	ん	つ	。	。	。	え	。
。	い	所	き	な	く	。	あ	か	追	た	と	だ	ば	も	。	。	え	。	。
	は	だ	な	都	目	。	る	っ	っ	ま	か	り	か	り			え	。	。
	は	と	市	市	的	。	ん	て	番	ま	に	に	に	だ			。	。	。
	ず	も	型	の	地	。	で	い	才	。	既	に	に	っ			。	。	。
	で	、	の	公	が	。	す	る	も	。	に	に	が	た			。	。	。
	、	、	園	に	な	。	か	。	歩	。	背	に	。	が			。	。	。
	想	橋	あ	。	い	。	？	。	き	。	中	。	。	。			。	。	。
	像	と	り	。	。	。	」	。	出	。	を	。	。	。			。	。	。
	す		な	。	。	。			し	。	。	。	。						。
	る		。	。	。	。			た	。	。	。	。						。
	こ		。	。	。	。			。	。	。	。	。						。
	と		。	。	。	。			。	。	。	。	。						。
	。		。	。	。	。			。	。	。	。	。						。

て	神	「	背	け	そ	「		を	が	こ	来	「	札	視	自	だ	も	で	
歩	社	あ	中	し	う	は		札	ら	け	た	は	か	線	分	ろ	の	に	『
き	の	の	で	は	言	子	番	か	自	し	ば	か	ら	を	の	う	何	『	』
な	境	は	才	緩	い	は	に	ら	分	を	り	り	数	左	札	か	か	』	』
が	内	あ	に	く	な	ん	歩	自	の	待	な	な	枚	側	は	上	の	』	』
ら	の	ん	行	口	が	た	行	分	の	た	の	な	分	に	右	と	規	』	』
こ	よ	た	を	角	ら	よ	を	の	札	せ	か	左	左	掛	右	則	』	』	』
け	う	り	促	を	自	り	し	を	を	て	？	側	下	け	下	的	』	』	』
し	な	少	した	と	の	し	た	し	手	い	」	に	を	ら	を	に	』	』	』
が	広	し	。	、	札	の	。	こ	に	る	」	を	最	れ	見	見	』	』	』
背	敷	前		ま	掲	元		け	し	い	」	初	初	て	と	と	』	』	』
中	地	に		た	げ	へ		し	、	」	』	に	に	い	、	と	』	』	』
越	を	や		正	て	と		の	最	」	』	見	見	た	、	案	』	』	』
し	、	っ		面	み	急		元	後	」	』	た	た	。	案	の	』	』	』
に	宿	て		を	せ	い		へ	ま	」	』	。	。	ま	の	定	』	』	』
そ	屋	来		向	る	だ		と	で	」	』	ま	ま	ま	定	』	』	』	』
う	に	た		き	。	い		急	抵	」	』	ま	ま	ま	』	』	』	』	』
語	沿	。		き	こ	い		い	抗	」	』	ま	ま	ま	』	』	』	』	』
り	つ	」		き	こ	い		い	す	」	』	ま	ま	ま	』	』	』	』	』
か	っ	」		き	こ	い		い	る	」	』	ま	ま	ま	』	』	』	』	』

ねえ。」	「さあ苦勞して下りてきたものが報われるか	ンジ色の光が灯っているのが見えた。	えてもらい更に数十秒歩くと、道の先にオレ	の通路に変わった。ということをごけしに教	それから数十秒で階段はなくなり、同じ幅	を大事に胸に抱えた。	も見えず不安だったが、声が聞こえた安心感	いてくる。先を歩いているはずのこけしの姿	反射した声はくぐもりねつとりと体に吸い付	安心しなもうすぐだよ。」	「ひっひっひっ。中々的を射た例えだねえ。	りますか？」	「まるで生き物の腹の中みたいだ。まだかか	い。	足場と体を伝う汗が想像以上に不快で堪らな	心なしかブヨブヨとしているような不安定な	の前は白く足下にすら炎の光は届いていない	の壁に掛かっていた提灯を持っているが、目	覆っている。こけしに言われ下り始めてすぐ
------	----------------------	-------------------	----------------------	----------------------	---------------------	------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	----------------------	--------	----------------------	----	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

こ	け	し	を	見	る	と	、	声	の	主	を	探	す	よ	う	に	遠	く	を
に	番	才	は	驚	き	全	身	を	硬	直	さ	せ	た	。	急	い	で	隣	の
反	響	し	て	聞	こ	え	る	こ	け	し	で	も	自	分	で	も	な	い	声
「	・	・	ね	？	」														
「	ち	よ	っ	と	や	だ	あ	ゝ	良	い	男	じ	ゃ	な	い	！	」		
「	こ	こ	も	ま	た	す	ご	い	所	で	す	・	・	・	」				
よ	う	に	聞	こ	え	た	。												
る	音	が	、	こ	の	場	所	は	神	聖	な	の	だ	と	訴	え	て	い	る
こ	の	壁	か	ら	吹	き	出	し	て	い	る	滝	が	水	溜	り	に	落	ち
幻	想	的	に	こ	の	空	間	を	照	ら	し	て	い	る	。	そ	こ	か	し
に	備	え	付	け	ら	れ	て	い	る	い	く	つ	も	の	松	明	の	光	が
ん	で	い	る	。	こ	こ	に	至	る	ま	で	の	靄	は	晴	れ	、	断	崖
び	え	立	ち	、	教	会	の	よ	う	に	縦	に	伸	び	た	空	間	を	包
き	な	水	溜	り	だ	っ	た	。	ゴ	ツ	ゴ	ツ	と	し	た	岩	肌	が	そ
空	間	の	半	分	ほ	ど	を	占	め	る	白	い	湯	気	を	発	す	る	大
ま	ず	最	初	に	目	に	飛	び	込	ん	で	き	た	も	の	は	、	こ	の
「	こ	こ	は	・	・	・	」	。											
け	た	巨	大	な	空	洞	の	入	り	口	を	く	ぐ	り	抜	け	た	。	
背	中	と	周	圍	を	交	互	に	見	定	め	な	が	ら	、	番	才	は	開
と	独	り	言	の	よ	う	に	何	か	を	含	ん	で	喋	る	こ	け	し	の

「	く	だ	ら	な	い	こ	と	言	っ	て	な	い	で	姿	を	見	せ	な
肩	で	頬	の	汗	を	拭	う	。										
繰	り	広	げ	ら	れ	る	会	話	に	つ	い	て	い	け	ず	、	番	才
「	ゲ	く	ロ	ゲ	く	ロ	ゲ	く	ロ	。								
「	や	だ	酷	く	な	く	い	。	噛	み	付	く	わ	よ	。			
よ	。																	
「	別	に	あ	ん	た	の	好	み	に	合	わ	せ	て	る	訳	じ	ゃ	な
と	で	し	よ	？	」													
て	来	た	と	思	っ	た	ら	こ	れ	っ	て	さ	く	、	あ	ん	た	
「	ち	よ	っ	と	八	雲	さ	く	、	た	ま	く	に	良	い	男	連	
き	さ	に	全	身	に	鳥	肌	が	た	つ	。							
湯	気	が	昇	っ	て	い	る	中	に	黒	い	影	が	あ	り	、	そ	
妙	な	所	で	途	切	れ	て	い	る	こ	と	に	気	付	い	た	。	
て	同	じ	方	向	へ	視	線	を	注	ぐ	と	、	一	箇	所	の	滝	
見	渡	し	、	「	い	た	ね	え	。」	と	い	う	こ	け	し	に	釣	
も	う	一	つ	の	聞	き	覚	え	の	な	い	声	に	番	才	も	辺	
「	い	く	え	く	て	く	る	く	。」									
じ	ゃ	な	ー	ん	も	面	白	く	な	さ	そ	う	く	。」				
「	た	だ	さ	く	タ	イ	プ	な	ん	だ	け	ど	ね	く	。	あ	ん	
見	渡	す	仕	草	を	し	て	い	る	。								

「これから世話になるかもしれないからね	た蛙だった。	鏡餅のようにでっぷりとしたお腹に顔が乗っ	丸とした大きな目に同じような角を生やし、	ピエールと紹介されたもう一匹の蛙は、真ん	みたいだな。」	「さっきの蛙にトマトとアボカドを足した	工口調の不思議な蛙。	あるどれとも違う小さい角を生やした、おネ	の眼。そしてその眼の上に今まで見たことの	円の直径の部分に太い筆で横線を書いただけ	た。ブヨブヨとした体に又メツとした見た目	誰もがよく知る生物を巨大化させたものだっ	った。思わず後ずさりしたくなるその姿形は	番才のカトリー又への第一印象はその体色だ	「マスタードに蜂蜜をかけたような色だな	松明の光の下へと徐々に這い出て来た。	で見えなかった影がのっそりと動く気配がし	と接するのように声をかけている。すると湯気	声の大きさにもこけしは怯むことなく、自分
---------------------	--------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	---------------------	------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	-----------------------	----------------------

